

谷川道子

「舞台芸術文献の翻訳と公開：ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての〈1938年問題〉」

ドイツ語チーム文献解題（翻訳文献一覧参照）

I：「翻訳プロジェクト」（以下「翻訳P」）とは？（研究代表者：秋葉裕一）

海外の重要な未邦訳演劇テキストを国内の演劇研究者・批評家の協力の下で翻訳、その成果をウェブ上で無償提供するというプロジェクト（2010年度より開始）。初年度は「ヨーロッパ世紀末転換期」における演劇論に焦点を当てドイツ、フランス、ロシア、英米の4か国語の翻訳および成果公開。その後、中国、東南アジア、ラテン・アメリカにおける演劇論。最後がこの「ヨーロッパの舞台表象の変容・転位としての〈1938年問題〉」。

II：第1弾「ヨーロッパ19世紀転換期演劇論」日本演劇学会シンポ 2011・12・3 @早稲田

- 2010年夏、突然に鴻英良さんからこういうプロジェクトをやりたいからドイツ語チームを作ってほしいと頼まれた。厳しい出版状況下、まずその意図やよし。
- なぜ第1弾が「ヨーロッパ19世紀転換期演劇論」か。これも納得。20年代演劇革命を準備したのも、近代演劇から現代演劇への分水嶺もこの辺ではないか、それがあまり注目されてこなかったことが、我々がチームの問題意識で、私の修論のテーマでもあった。
 - 1600年頃、素人の民衆演劇だったものに劇作家が戯曲を提供して近代演劇成立、
 - 1900年頃にそれが根底から変化の兆し、演出家の自律と国境の壁を破る運動
 - 自然主義文学運動＋自由劇場運動＝パリ、ベルリン、モスクワ、ハンガリー、東京へ
 - 演出家の登場＋技術革新→さまざまな演劇論＝アッピア、クレイグ、ブラーム＝ドラマからパフォーマンスへ／劇作家から演出家の時代へ／演劇学の誕生＝20年代演劇革命＝歴史的・古典的アヴァンギャルド＝リヒテ「第1次パフォーマンス的な転回」等々への前史。
- ドイツ語チーム（この時は本田雅也＋坂巻隆志＋谷川）
 - ① 自然主義文学運動における戯曲の変容と、自由劇場運動における演出家の自律＝ブラームとハウプ

トマン（本田）

- ② 象徴主義的な戯曲と演出＝ラインハルトとホフマンスタール、ザルツブルク演劇祭（坂巻）
- ③ ルカーチ：『近代戯曲発展史』＝近代戯曲変容の本質的考察＋青年ルカーチが1904-08にブダペストで自由劇場運動に参加、06-07年に20歳で執筆した演劇論。文化社会学的な野望＋近代演劇と市民社会そのものの変容を戯曲の側から考察。鴻さんのリクエスト。序論だけ池田浩士氏の既訳があった。600頁の大著、2部構成＝勃興期の市民文化はイブセンがその最後、自然主義は下降期。世紀転換期の自然主義から象徴主義の流れへの第9、10、14章を訳出。約百ページで、これで全体の5分の1。本来は有機的なつながりで全訳されるべき名書。翻訳の間に「2011年3月11日」と我がくも膜下出血の手術。リハビリ入院中に脳トレとして翻訳…忘れがたいが、誤訳もアリか。
3. この翻訳Pの第1弾完成の段階でできるだけ宣伝活用してもらおうと、「災害と演劇」のテーマの早稲田大での演劇学会の場を借りてシンポジウム、2011年12月3日（谷川の社会復帰？）。
4. 2011年度以降は中国、東南アジア、ラテンアメリカの演劇文献の翻訳紹介も加わった。

III：最後にどこに着地してこの西欧演劇翻訳Pを締めようか：2013年度の〈1938年問題〉プロジェクト

20年代第一次演劇革命のモダニズムは世界大戦中に消え、戦後の60年代に起こった第二次演劇革命＝ネオ・アヴァンギャルド——その間の考察がエアポケットではないか、表象の深層の変容が1930年代に起こったのではないかの直観。〈1938年〉を〈1968年〉と同じような象徴的年号と見て、20年代から30年代への「舞台表象の問題系の転位と展開」として、問題の所在を浮かび上がらせることができないか。

1934～39年は政治と芸術が目に見えてせめぎあった時代。その象徴が〈1938年〉。スターリンによる反形式主義キャンペーン、社会主義リアリズムのテーゼ化から

大粛清への展開を左目で見、ベルリン・オリンピックとその映画化へのレニ・リーフェンシュタールの起用とナチスの「退廃芸術展」に象徴されるヒトラーによる芸術の政治的利用（＝「政治の芸術化」）を右目で見ながら、スペイン市民戦争とピカソの『ゲルニカ』＋パリ万博と並行して、亡命ドイツ人の間で表現主義の評価をめぐる論争が展開し、反ファシズム国際作家会議が文化遺産擁護を掲げてパリで開催されるという時代状況のさなかで、政治と美学のせめぎ合いが、その左右両極のベクトルを最も顕わにした時代だった。

さて今回の翻訳Pでそれをどう切るか。どう捌くか。

- ① 鴻英良さん：1937年のメイエルホリド弾劾全体集会の記録が公開、反形式主義キャンペーンから大粛清への流れへの象徴的事件で、演劇表象の転換には重要文献なのだが、発表の場所がない＝翻訳Pはそういうものを発表できる場であるだろうと、〈テーマ1938問題〉としてそのための文脈をつくらう、というのがこの「1938年問題」翻訳Pの出発点だった。そのうえでのドイツ語チームの結束と大枠のテーマ設定と文献収集。
- ② ソ連での展開と関連してモスクワのドイツ人亡命者の間で1938年を頂点にDas Wort（「言葉」）誌を中心に起こったのが表現主義論争で、リアリズム／形式主義論争＋古典遺産論争とも重なった。未邦訳の関連文献を探したが、池田浩士編訳の『ルカーチ、プロッホ、ゼーガースー表現主義論争』（盛田書店1968）と『表現主義論争』（れんが書房新社1988）の大労作にほぼすべてが既訳出。それなら直接にお尋ねしようと、ご無理を承知で、2012年12月に研究会に京都から来て頂いた。あいにく私は心臓発作で出られず、文献の補遺をドイツ語チームからお願いして、池田さんから演劇分野で抜けている文献補遺として推薦されたのが5点（ヴォルフ2点、ピスカートア1点、ライヒ1点、トラー1点）＝本田雅也＋萩原健両氏の訳で、ピスカートアで博士論文執筆中の萩原健氏が解題（ドイツ語文献解題A：「ソ連にいたドイツからの亡命者たち—トラー、ヴォルフ、ピスカートア、ライヒ」）を担当。論争には直接は参加しなかったブレヒトが危惧して論争の拡大の打ち切りを提案。

加えて、Das Wortの2編は柴田隆子訳でロシア語チームに採録＝1934年のゴーリキーの社会主義リアリズム発言（論争の発端）と1936年逝去の関連の追悼論（鴻英良氏の解題参照。このくらいしか言及がなかったのは、逆にみな粛清の気配を感じて自重していたのではないか？）

- ③ それとも関連するのが、文化遺産擁護を掲げて1935年パリ、36年ロンドン、37年スペイン＋パリで開催された反ファシズム国際作家会議だろう。法政大学出版1997年『文化の擁護——1935年パリ国際作家大会』（五十嵐＋高橋＋石黒他共訳の700頁の大著労作）に全訳あり。ブレヒトやニザンやアラゴン、マルロー、ネルーダなども参加。

対して1938年にパリでブルトンらが「国際シュールレアリズム展」を開催したことには35-36年のディミトロフの反ファシズム統一戦線の問題系も絡んでくるのか。ナチスの「退廃芸術展」への抵抗でもあり、反ファシズム闘争とともに、スペイン人民戦線の経緯やベルリン・オリンピックをはさんで、パリ万博でのスペイン館でピカソの『ゲルニカ』が展示された時でもあり、リーフェンシュタールのオリンピック映画『オリンピア』も同じところに公開。アルトの演劇論も同じ頃に書かれた——これらのフランスの文化状況については、フランス語チームにお任せして、ドイツ語チームとしては採用文献なし。堀切克洋氏の解題を参照されたい。塚原史氏に総括シンポの際にパリの文化状況や背景を話していただいた。

イタリアの未来派とファシズムの関連文献の翻訳と解題は若い太田岳人氏に頑張って頂いた。

- ④ 本当は、②と③に関連したブレヒトの転位の問題も重要なのだが。教育劇（アンガージュマンのモバイルな小さな演劇）から叙事的演劇への転回（1938年の原子核分裂成功を背景にした『ガリレオの生涯』を皮切りに、異化・歴史化の大きな視角からの近代批判劇へ）。過去と現在の関係性において〈歴史の天使〉の顕われ方はポジとネガだが、亡命後期からのブレヒトの異化理論の考察の深化にはベンヤミンの存在が大きく与っていた。歴史が〈今〉になるベンヤミンと、〈今〉が歴史になるブレヒト、というように構想された今と歴史の弁証法から、ブレヒトは、現代演劇のあり方と同時に、過去の作品のアクチュアルな顕われへの実践的方法をも、発展させていった。ブレヒトの眼ざしの根底にあったのは、芸術文化の新しきものの生産と古いものの再生産を、ふたつながら歴史のプロセスの中で、解放的实践・社会的生産と捉えていく態度だ。ベンヤミン流に言えば、アウラ的な「芸術作品」の権威から要請される催眠的な帰依に、観客の党派化を対置させること。それゆえ作品は、権威的に手渡された一義的明瞭さの鎖に受容者をつなぐのではなく、むしろ、受容のプロ

セスによる蘇生の空間をつくりだすようなテキスト、という性格をもつことになる。生命を与えるのは、この受容の場だ。そういう思考と戦後の演劇実践は、プレヒトなりの「表現主義論争」への応答であっただろうし、その後の〈1968年〉を挟んで顕著になった受容美学や古典論争、古典改作や演出家の時代、ポストドラマ演劇の先駆けも、ここにみてとれるのではないか。ただし、プレヒト文献はほぼすべて既訳があり、ここには採用文献なし。谷川訳光文社古典新訳文庫（2013年）『ガリレオの生涯』の解説を参照されたい。

- ⑤ 以上の②③④のテキスト論の変容を巡る転位もさることながら、この頃重要だったのは、〈身体論＋空間論＋ダンス論〉のパラダイム・チェンジでもあった。最初の頃は、メイエルホリドの「ピオメハニカ」とアルトの「反テキスト演劇」とシュレンマーの「身体的空間論」の三角関係で表象の変容を考えることを翻訳Pの考察の起点にする意図だったのだが、言語別ということでドイツ語チームは、パウハウスで舞台芸術工房を担当したオスカー・シュレンマー研究で博士論文を完成させた柴田隆子さんを中核に、パフォーマンス論研究が専門の古後奈緒子さんと二人組で、1928年のドイツ舞踊家会議などからラバン、ヴィグマン、ヨースまでの20-30年代の舞踊論の展開を、70年代以降のピナ・バウシュやスザンヌ・リンケなど現代ダンスの展開までつながる源流としてフォロー。柴田隆子ドイツ語文献解題B：「空間論・身体論・舞踊論の展開からみた〈演劇〉表象の転位—シュレンマー、ヨース」、古後奈緒子ドイツ語文献解題C：「抵抗と順応のドイツ・モダンダンス小史—ラバンとヴィグマン」、邦訳と解題も含めて、身体論と空間論とダンス論の20年代から30年代への展開の基本文献がこれまではほぼ未邦訳・未紹介だったこともあり、ここでこういう形でまとめて紹介されたのは画期的で、意味深かったと思う。

IV：表象・検討対象としての1938年

① ベーター・ヴァイスの遺作『抵抗の美学』をめぐる。

1982年5月10日、ベーター・ヴァイス（1916-1982）はストックホルムで逝去。享年65歳。スウェーデン国籍のまま、1960年に43歳で自らのコラージュ画を添えたマイクロ・ロマン『御者の身体影』でドイツ文学入りし、2冊の自伝小説『両親との別れ』と『消点』、そして何より個人主義者で性と夢の探求者サドとジャコバン派のマラーを対決させた（媒介されたフロイト対マル

クス）通称『マラー／サド劇』を皮切りに、アウシュヴィッツ裁判の刻明な記録に基づく『追究』、ベトナム戦争を何百年にわたる抑圧の歴史として描いた通称『ベトナム討論』（1968年に世界一斉上演）、『亡命のトロツキー』、『ヘルダーリン』等の記録演劇の戯曲で六十年代演劇革命の一翼を担う世界の劇作家となったヴァイス。その彼が執筆に10年を費した最期の仕事が、質量ともに膨大なこの三部作小説、『抵抗の美学』だった。

第一巻の刊行は1975年、第二巻が78年、第三巻が81年。全巻完結の81年には、執筆にあたって参照された文献や資料、写真、ヴァイス自身の考察やメモを収めた二巻の『作業日誌1971-1980』も公開された。82年には三巻を一冊本にした電話帳を越す厚さの1,000頁で25マルク（約2,500円）の廉価版『抵抗の美学』も出版された。すでに1965年、『追究』初演の年に「社会主義への信仰告白」をして以来、西ドイツでのヴァイスへの批評はプロとコントラに両極化していた。それでもゾーアカンパ社から送って貰ったこの作品の書評のコピーは、厚さだけで2センチを越す。『亡命のトロツキー』以来、「信仰告白」した陣営（ソ連、東ドイツ）からも批判や非難をうけたヴァイスだったが、『抵抗の実学』は東ドイツでも出版された。本文を繰り返しになるが、これはまさに時代の君だった。

時代に閉じこめられた存在を、自らに向かって、同時に他者に向かってひらくこと。抵抗とは、歴史のプロセスの内部にあって石化に自らの言葉と特性を奪いとられかねないものたちが、自らの言葉とアイデンティティを探すこと、奪いとられた存在を奪い返す行為だ。歴史と文化と人間存在の石化に抵抗する類的な闘いのイメージ。それが、“僕ら”によるベルガモン^{ベリーフ}の浮彫りの解説に、まずは冒頭で暗示的に示されていく。

“僕ら”とは、夜学のロシア語講座で知りあった三人の若い青年、この小説の語り手で最後まで無名の“僕”と、コッピ、ハイルマンの三人。時は1937年9月22日、“僕”が義勇兵として内戦のスペインへ旅立とうとする直前。所は、“僕ら”が褐色の制服を着た男たちに交じって、自らもナチスの制服で抵抗運動の意志と活動を偽装して訪れた、ベルリンのベルガモン美術館。小説はそこから、1945年5月7日に終息させられた、ファシズムという時代の野蛮に抗する「僕らの抵抗の物語」として、大きな弧を描いていく。中心はその間の1937-42年だ。

実は、ヴァイス逝去のときにたまたま西ドイツに滞在していた私は、山ほどの逝去報道やヴァイスの映画のTV放映、ヴァイスの絵画展覧会まで体験、そのせいか、帰国後に三島憲一氏から1983年秋の静岡大学での日本独文学会のシンポジウム「〈1968〉年以降の西ドイツの

文学と社会①」でその発表を頼まれた。日本では、60年代から70年代にかけて矢継早にヴァイスの作品は翻訳・紹介、上演されたが、あたかもひとつのブームが終焉したかのように、『抵抗の美学』は黙殺というに等しい扱いを受けていた。ともあれ、この作品を“黙殺／石化”の中から救い出すことだろうと引き受けた。ヴァイス活躍の当時は東西冷戦体制の真っ盛り？ どちら側に立つかが厳しく問われてもいた。ヴァイスはまさにそのさなかで両極に引き裂かれていた。そしてその反ファシズム闘争に関わらなかった自己のトラウマと、闇に葬られたままの歴史の中のトラウマ（ミュンツェンベルクやトロツキー）の検証のような架空の自伝小説を、遺作としたのだった。そういうトラウマを刳決すべきものとして描いたのだ。

この『抵抗の美学』も、本来は全巻通して邦訳紹介されるべき重要文献だろうが、もはや容易なことではないかもしれない。しかし無視抹殺されていい文献でも決してない。ここに収めさせて貰ったのは、元来は、口頭発表だけでは残らないからと、1985年に「新日本文学」誌編集長だった久保覚氏に請われて書いたエッセイ「今日のユリシリーズ」だった。この本『抵抗の美学』の完成直後に、ペレストロイカ（改革）とグラスノスチ（情報公開）を掲げてゴルバチョフが登場したが、86年のチェルノブイリ原発事故を経て、89/91年にソ連・東欧体制も崩壊。〈1938年問題〉は〈1968年問題〉と連動し、〈89/91年のソ連・東欧体制の崩壊〉とも通底していた

のかもしれない。研究会に来て頂いたドイツ・東欧史研究の小沢弘明氏の、〈ファシズム vs 反ファシズム〉の図式だけでは歴史を読み違う、すでに1938年には新自由主義が始まっていたのではないかと指摘も目から鱗だったが。

萩原健氏の解題でも触れてもらっているが、そういう経緯自体も含めて想起されるべき歴史的なドキュメントではないかと、この〈1938年問題〉の締めくくりとして、多少の手入れの上で採録させて頂いた。今回特に書き加えたのは、ヴァイス自身が体験しなかった「プレヒト工房」に“僕”を参加させて、プレヒトの思考と作業方法を検討させている、第2巻第2部の「プレヒトの章」についてである。せめてこういう形ででも、ヴァイスの『抵抗の美学』を紹介しておきたかった。「無名のヘラクレスたち；反ファシズム闘争の光と影——ペーター・ヴァイスの遺作『抵抗の美学』のために」と改題した思いもそこにある、若い世代にこういう時代と呻吟と考察があったのだと知って、受け止め・受け継いでほしかったからだ。

② 他にも「表象・検証対象としての1938年」は、ハイナー・ミュラー遺作『ゲルマニア3』やトーマス・ベルンハルトの戯曲『ヘルデンプラッツ（英雄広場）』（池田信雄訳）、イエリネク『死者の子供たち』（中込啓子他訳）などドイツ語圏には枚挙にいとまがないのだが、以下そういう関連の詳述までは省略。